

トマス・アキナス
『定期討論集 靈的被造物について』第七項 試訳

石田 隆太

はじめに

本稿は、トマス・アキナスによる『定期討論集 靈的被造物について』(*Quæstio disputata de spiritualibus creaturis*)の全訳を目指す試みの一環であり、以下の拙稿の続編である。

石田隆太「トマス・アキナス『定期討論集 靈的被造物について』第一項 試訳」、『宗教学・比較思想学論集』, 第15号, pp.33-57, 2014年. [石田2014aと略記]

同「トマス・アキナス『定期討論集 靈的被造物について』第二項 試訳」、『筑波哲学』, 第22号, pp.129-53, 2014年. [石田2014bと略記]

同「トマス・アキナス『定期討論集 靈的被造物について』第三項 試訳」、『宗教学・比較思想学論集』, 第16号, pp.57-91, 2015年. [石田2015と略記]

同「トマス・アキナス『定期討論集 靈的被造物について』第四項 試訳」、『古典古代学』, 第8号, pp.31-56, 2016年. [石田2016aと略記]

同「トマス・アキナス『定期討論集 靈的被造物について』第五項 試訳」、『宗教学・比較思想学論集』, 第17号, pp.105-27, 2016年. [石田2016bと略記]

同「トマス・アキナス『定期討論集 靈的被造物について』第六項 試訳」、『筑波哲学』, 第24号, pp.39-63, 2016年. [石田2016cと略記]

この試訳の主要な意図に関してはこれまでの稿を参照されたい。以下では、これまでの稿と度々重複するところではあるが、便宜のために凡例を載せることとする。

凡例

- ・訳出にあたっては次のレオ版を底本とした。

Cos, J. ed. *Sancti Thomæ de Aquino Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, t.24.2: *Quæstio disputata de spiritualibus creaturis*. Roma-Paris: Commissio Leonina-Éditions du Cerf, 2000.

- ・他の版としては次の批判的校訂版も参照した。

KEELER, L. W. ed. *Sancti Thomæ Aquinatis Tractatus de spiritualibus creaturis*. Romæ: Apud Ædes Universitatis Gregorianæ, 1946. [Keeler と略記]

- ・ただし、レオ版のテキストにはいくつか読解に難のある箇所があるため、場合によって次のものが提案する読みに従った。

GULDENTOPS, G. & STEEL, C. "Critical Study: The Leonine Edition of *Q. de spiritualibus creaturis*." *Recherches de théologie et philosophie médiévales*, 68(1), 2001, pp.180-203. [G&S と略記]

- ・今回参照した『定期討論集 霊的被造物について』の近代語訳は次の通りである。

BRENET, J.-B. *Les créatures spirituelles*. Paris: J.Vrin, 2010. [仏訳]

FITZPATRICK, M. C. *On Spiritual Creatures*. Milwaukee: Marquette University Press, 1949. [英訳]

GOODWIN, C. R. "A Translation of the *Quæstio disputata de spiritualibus creaturis* of St Thomas Aquinas, with Accompanying Notes." M. A. thesis, Australian Catholic University, 2002. [英訳]

SAVAGNONE, G. "Le creature spirituali." In S. Tommaso d'Aquino, *Le questioni disputate*, vol.4, pp.522-809. Bologna: Edizioni Studio Domenicano, 2001. [伊訳]

- ・訳者自身による訳文中の [] は訳者による補いであり, [] は原語の引用である。
- ・訳語の選定にあたってはトマス・アクィナスによる著作の既存の日本語訳等を主に参照したが、参照したものの一例として次のものを挙げておく。

長倉久子, 蒔苗暢夫, 大森正樹 編『トマス・アクィナス「神学大全」語彙集 (羅和)』, 新世社, 1988 年。

- ・註にて使用した略号の一覧は次の通りである (上で示したものは除く)。なお慣例に従い, アリストテレスの著作にはベッカー版の頁数と行数を付した。

Borgnet

B. Alberti Magni, Ratisbonensis episcopi, ordinis Prædicatorum, Opera omnia, ex editione lugdunensi religiose castigata, et pro auctoritatibus ad fidem vulgatæ versionis accuratiorumque patrologiæ textuum revocata, auctaque B. Alberti vita ac bibliographia suorum operum a Pp. Quétif et Echard exaratis, etiam revisa et locupletata. Ed. BORGNET, S. C. A. Parisiis: Apud Ludovicum Vivès, 1890-9.

DP

"*Quæstiones disputatæ de potentia*." In *S. Thomæ Aquinatis doctoris angelici Quæstiones disputatæ*, vol.2, pp.7-276. Ed. BAZZI, P., CALCATERRA, M., CENTI, T. S., ODETTO, E. & PESSON, P. M. Taurini-Romæ: Marietti, 1965¹⁰ (1949¹).

EDND

S. Thomæ Aquinatis doctoris angelici O. P. In librum Beati Dionysii de divinis

nominibus expositio. Ed. PERA, C. Taurini-Romæ: Marietti, 1950.

L.

Sancti Thomæ de Aquino Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita. Romæ, 1882-.

PL

Patrologiæ cursus completus omnium SS. Patrum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum sive Latinorum, sive Græcorum. Series Latina. Ed. MIGNE, J.-P. Parisiis, 2 ed.

QR

Doctoris Seraphici S. Bonaventuræ Opera omnia. Claras Aquas, Quaracchi: Typographia Collegii S. Bonaventuræ, 1882-9.

SS

S. Thomæ Aquinatis doctoris communis Ecclesiæ Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi. Ed. MANDONNET, P. & MOOS, M. F. Parisiis: P. Lethielleux, 1929-47.

Venetiis

Aristotelis Opera cum Averrois commentariis. Venetiis: Apud Junctas, 1562-74.

Waszink

Plato Latinus. Vol.4: Timæus a Calcidio translatus commentarioque instructus in societatem operis coniuncto P. J. Jensen. Ed. WASZINK, J. H. London-Leiden: In ædibus Instituti Warburgiani & E. J. Brill, 1975² (1962¹).

アウグスティヌス著作集

『アウグスティヌス著作集』第1巻-, 教文館, 1979年-.

アリストテレス全集旧

出隆 監修『アリストテレス全集』第1-17巻, 岩波書店, 1968-73年.

アリストテレス全集新

内山勝利, 神崎繁, 中畑正志 編『アリストテレス全集』第1巻-, 岩波書店, 2013年-.

神学大全

高田三郎ほか訳『神学大全』第1-45冊, 創文社, 1960-2012年.

心身問題

川添信介 訳註『トマス・アキナスの心身問題——『対異教徒大全』第2巻より』知泉書館, 2009年.

- ・本稿では註にて他の文献からの引用を大量に行っているが、その中で特に引用元を明記していない日本語訳はすべて拙訳であることを断っておく。

試訳

靈的被造物について

第七項¹

第七に問題とされるのは、靈的実体が空氣的物体² [corpus aëreum] と合一されるか否かである。

【異論】

そして然りと思われる。その理由は以下の通りである。

一. アウグスティヌスは『「創世記」逐語註解』第3巻と『神の国について』第8巻³で、悪霊たちは空氣的身体を持つと言う⁴。しかるに、悪霊たちは靈的実体である。それゆえ、靈的実体は空氣的物体と合一される。

二. さらに、アウグスティヌスは『悪霊たちの予言について』という書物で、悪霊たちは空氣的身体の精妙さによって人間の感覚を超越すると言う⁵。ところで、こうしたことは、悪霊たちが空氣的物体と本性的に合一されなかったなら、あらぬことだったであろう。それゆえ、諸々の靈的実体は空氣的物体と合一される。

三. さらに、中間は両端と違わない⁶。しかるに、諸天体の領域では、魂化された諸天体を措定する人々に即するなら生が見出される一方で⁷、土の領域では、諸々の動物と植物において生が見出される。それゆえ、空気に属する中間の領域でも⁸生が見出される。そしてこうしたことは、鳥たちの生とは関係づけられえない。なぜなら、鳥たちは、空気の僅かな空間に向かって土よりも上に上昇する [だけだ] からである⁹。また、空気の他の空間全体が生を空にしたままにするということは適合的だとは思われないであろう。したがって、そこ [すなわち空気の領域] には何らかの諸々の空氣的動物 [animal aëreum] がいると——と思われるし——措定しなければならない。以上に基づくと、何らかの諸々の靈的実体が空氣的物体と合一されるということが帰結する¹⁰。

四. さらに、より高貴な物体の形相はより高貴である。しかるに、空気は土よりも高貴な物体である¹¹。というのも、空気の方がより形相的で精妙だからである。し

たがって、もし地上的物体と、すなわち人間の身体と、魂である靈的実体が合一されるなら、ましてなおさら、魂である靈的実体は空氣的物体と合一されることになる¹²。

五. さらには、よりよく適合するものどもの合一の方がより容易である。しかるに、空気は、人間の身体のような混交物体〔*corpus commixtum*〕よりも魂によりよく適合すると思われる。なぜなら、アウグスティヌスが『「創世記」逐語註解』で言うように¹³、魂は空気を通じて身体を統轄するからである。それゆえ、魂は、混交物体よりもなお、空氣的物体と合一される方がよりよく本性とされている¹⁴。

六. さらには、『天球の実体について』という書物では「円環運動は魂に固有である」と言われる¹⁵。そしてこれはなぜなら、魂は、自分に関わる限りでは、すべての部分へと動くということに対して無差別だからである。しかるに、こうしたことは空気にも適合すると思われる。なぜなら、空気は、軽いものどもと一緒に軽く、重いものどもと一緒に重いからである。それゆえ、魂は空気と合一されると最大限に思われる。

【反対異論】

しかし、以上に反対する。

一. 魂は器官的身体〔*corpus organicum*〕の現実態である¹⁶。しかるに、空氣的物体は器官的ではありえない。なぜなら、空氣的物体は、固有の境界〔*terminus*〕によってではなくて外にある境界によってのみ境界づけられうるがゆえに、形づくられうるものではないからである。それゆえ、魂である靈的実体は、空氣的物体と合一されえない¹⁷。

【主文】

解答. 以下のことが言われるべきである。靈的実体が空氣的物体と合一されることは不可能である。そのことは三通りに明示されうる。まず第一には次の通りだからである。他のすべての物体の中で、諸元素の単純な物体はより不完全である。というのも、それらは、他のすべての物体から見れば質料的だからである。それゆえ、何らかの単純な元素的物体が形相としての靈的実体と合一されるということは、諸事物の秩序の論理に即して適合的ではない。第二の論理は次の通りである。空気は全体においておよび自分のすべての部分において類似した物体である。それゆえ、もし空気の何らかの部分と何らかの靈的実体が合一されるなら、同じ論理によってその靈的実体は空気全体とも、また同様にして他の任意の元素とも合一されることになるが、それは馬鹿げたことだと思われる¹⁸。第三の論理は次の通りである。靈的実体は何らかの物体と合一されるということは二通り見出される。一方の仕方では、諸々の靈的実体が諸天体と合一されるということが既述であるように¹⁹、物体に運動をもたらす

〔exhibere〕ためである。他方の仕方では、人間の魂が諸々の身体感覚を通じて諸々の知を獲得するために身体と合一されるように、霊的実体が身体を通じて自分の固有の作用——それは知解することである——のために助けられるためである。ところで、霊的実体が空気と合一されえないのは、まず運動の論理によってである。なぜなら、空気の本性的な形相を随伴する或る運動は空気と共本性的〔connaturalis〕だが、何らかの物的な原因には還元されえないような何らかの運動は、空気全体においても空気の何らかの部分においても見出されないからである。それゆえ、空気の運動に基づくと、何らかの霊的実体が空気と合一されるということは窺われない。また霊的実体が空氣的物体と合一されないのは、知的作用の完全性のゆえでもある。というのも、『魂について』という書物で証明されるように²⁰、単純な物体は感覚の道具ではありえないからである。それゆえ、霊的実体はいかなる仕方によっても空氣的物体とは合一されないということが残される²¹。

【異論解答】

それゆえ、

一．第一に対しては以下のことが言われるべきである。悪霊たちが空氣的身体を持つとアウグスティヌスが言う場合はどこでも、彼は、まるで固有の見解に基づいて言明するかのようにではなくて、他の人々の意見に即して語っている²²。それゆえ、彼は『神の国について』第21巻で「学識ある人々によって窺われたように、悪霊たちにも、濃密で湿った空気からなる、或る自分の身体がある。他方で、もし、悪霊たちはいかなる身体も持たないと誰かが²³断言する²⁴なら、この事柄については、労苦の多い探究によって骨を折るべきではなく、頑固な討論によって探求されるべきでもない」と言う²⁵。

二．そして以上を通じて第二に対する解決は明らかである。

三．第三に対しては以下のことが言われるべきである。より下位の領域では、すなわち土の周辺には、諸元素の混合の場所がある。ところで、諸々の混合物体〔corpus mixtum〕は、混合の同等性に到達すればするほど、それだけ一層それらは相反するものどもの両端から遠ざかるのであるからして、相反性なしにある諸天体との或る類似を随伴する。そしてその場合、生は中間の領域においてよりも最上位と最下位の領域においてよりよくありうるということは明らかであり、それは特に、より下位のものどもにおいては、複合〔complexio〕の同等性により近接したものであればあるほど、それだけ一層物体が生に対して準備されたものである場合のことである。

四．第四に対しては以下のことが言われるべきである。空気の物体は土よりも高貴である²⁶。しかるに、複合の同等な物体は両者〔すなわち空気および土〕よりも高貴である。なぜなら、それは相反性からはより遠いもの〔elongatus〕だからである。そ

してこうした物体だけが霊的実体と合一されることが見出される。しかしながら、その物体においては、他の諸元素における活動力の超出のゆえに、同等性を構成するには、より下位の諸元素が質料的にはより多く豊富であるということが必然である²⁷。

五. 第五に対しては以下のことが言われるべきである。魂が空気を通じて自分の身体を統轄すると言われるのは、運動に関してである。なぜなら、空気は他の厚い諸物体よりも運動を担いやすいからである。

六. 第六に対しては以下のことが言われるべきである。空気はすべての運動に対して無差別であるのではなくて、或るものどもから見れば軽く、他のものどもから見れば重い。それゆえ、こうしたことに基づくと、空気が〔形相としての〕魂を通じて完成されうるというようなことは保持されない。

¹ 平行箇所：『「命題集」註解』第2巻第8区分第1問題第1項；『対異教徒大全』第2巻第90-91章；『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項；『神学大全』第1部第51問題第1項；『定期討論集 悪について』第16問題第1項；『分離実体について』第18-19章。

² 以下では文脈に応じて、《corpus》に対して「物体」と「身体」という訳語を使い分けることとする。

³ G&S (p.192) に従って、《IV》を《VIII》と読み替える。

⁴ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第3巻第10章 (PL34,284) 「デーモンたちは大氣的な生き物であるという。というのもその身体は大氣的な本性をもってきわめて活動的だからである。また受動よりも能動により適した元素がデーモンたちのうちで優っているため、死によって解体することがないという」(アウグスティヌス著作集16, p.78)；『神の国について』第8巻第16章 (PL41,241) 「それゆえ、同じプラトン派の哲学者(アプレイウス)は、ダイモンの性格について次のように語っている。ダイモンは、人間が魂の激情によって駆り立てられる同じ激情によって駆り立てられて、不正によって刺激され、恭順や贈与物によってもてはやされ、名誉を喜び、さまざまな宗教的祭儀をたのしみとし、もしそれを怠るならば不愉快に感じ、それらを行なうように駆り立てる、と。その他のことにおいても、例えば、鳥占い、腸ト、予言、夢の啓示等はダイモンの働きであり、魔術師の不思議もまたダイモンによって起こると言っている。しかし、彼はダイモンをより簡単に定義して、ダイモンは種類としては生命的存在であり、魂の点では感情的であり、精神の点では理性的であり、身体の点では空気からできており、時間的には永遠である。そしてこれら五つの性質のうち、はじめの三つはダイモンとわたしたち人間に共通しており、四番目のものはダイモンだけに固有なものであり、五番目のものはダイモンと神々とが共通して持っているものである、と言っている。／しかし、ダイモンはわたしたち人間と共有している上記の三つの性質の中、また二つの性質を神々とも共有しているとわたしは思うのである。彼(アプレイウス)は神々もまた生命ある存在であると言い、それぞれの元素をそれぞれの存在に配分して、わたしたち人間

を、地上に生き感している他の存在と共に、地上的な生命ある存在の中に位置づけており、魚やその他の泳ぐものを水中の生命ある存在の中に、ダイモンを空中の生命的存在の中に、そして、神々をアイテールの生命的存在の中に位置づけている。それゆえ、ダイモンは、種類からして生命ある存在である限り、彼らはただに人間と共通しているのみならず神々とも獣とも共通しているのである。精神の点で理性的である限り彼らは神々と人間とに共通しており、時間の点で永遠である限り、彼らは神々にのみ共通しており、魂の点で感情的である限り人間にのみ共通しており、身体の点で空気である限りダイモン自身に固有な在り方をしているのである」(アウグスティヌス著作集 12, pp.200-1) ; 第9巻第8章 (263) 「ところで、[アプレイウスの] あのダイモンについての定義を過少に考量すべきであろうか(そこにはたしかにすべてのダイモンが含まれている)。彼は言う、「ダイモンは種類としては動物であり、魂の点では感情に従い、精神の面では理性的であり、身体においては空気であり、時間の点では永遠である」と(p.253) ; カルキディウス『「ティマイオス」註解』第135章 (Waszink, p.175, ll.16-18) 「それゆえ、悪霊の定義は次のようなものであることになる。悪霊とは、理性的[rationalis] で不死で受動しうるもの[patibilis] でエーテル的な、人間たちを勤勉さに与からしめる[impertire] 動物である」 ; トマス『「命題集」註解』第2巻第8区分第1問題第1項第1異論 (SS 2, p.203) 「アウグスティヌスは、「悪霊たちは類という点では動物であり、こころ[animus] という点では受動的であり、精神という点では理性的であり、身体という点では空氣的であり、時間という点では永遠である」というように悪霊たちを定義するアプレイウスの諸々の言葉を『神の国について』第8巻で導入する。また、アウグスティヌスはこの定義を否認しない。それゆえ、悪霊[および天使] たちは本性的に合一された空氣的身体を持つと思われる」 ; 『対異教徒大全』第2巻第90章 (L.13, p.550b, ll.21-24) 「さて以上から、アプレイウスやある種のプラトン派の人々の見解が排除される。すなわち、彼らの語るところによれば、ダイモンは「空氣的物体によって動物であり、精神によって」理性的であり、「こころにおいて受動的であり、時間において永遠である」(心身問題, p.401) ; 『ディオニュシオス「神名論」註解』第4章第19講 (EDND, p.196b, n.538) 「実際、或る人々は、アプレイウスが言いアウグスティヌスが『神の国について』第9巻で紹介するように、悪霊たちは「身体という点で空氣的な、精神という点で理性的な、こころという点で受動的な、時間という点で永遠な動物」であると措定した」 ; 『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第11章 (L.45.1, p.256, ll.153-6) 「たしかに悪霊たちをプラトン主義者アプレイウスは次のように定義した。悪霊たちは、身体という点で空氣的な、精神という点で理性的な、こころという点で受動的な、時間という点で永遠な動物である、と」 ; 『定期討論集 悪について』第16問題第1項第1異論 (L.23, p.279, ll.3-11) 「アウグスティヌスは『「創世記」逐語註解』第11巻で「理性的被造物の霊においては、生きること、および、悪魔そのものないし悪霊たちの霊がそうするように空氣的身体であれ、人間の魂がそうするように地上的身体であれ、身体を生かすこと自体が善い」と言う。しかるに、生かされるものは生かす霊と本性的に合一されている。なぜなら、生は或る本性的なものだからである。それゆえ、悪霊たちは自身と本性的に合一された空氣的身体を持つ」 ; 第8異論 (p.280, ll.82-93) 「さらには、何らかのもの

定義に措定されるものは、そのものにとって本性的である。なぜなら、定義は事物の本性を表示するからである。しかるに、身体は悪霊の定義に措定される。というのも、カルキディウスは『「テイマイオス」註解』で「悪霊とは、理性的で不死で、こころという点で可受動的〔passibilis〕で、身体という点でエーテル的な動物である」と言い、アプレイウスは『ソクラテスの神について』という書物で悪霊たちとは「類という点で動物であり、こころという点で受動的で、精神という点で理性的で、身体という点で空氣的で、時間という点で永遠な動物である」と言い、[これらの言明を] アウグスティヌスは『神の国について』第7巻 [正確には第8巻] で紹介する。それゆえ、悪霊たちは自身と本性的に合一された身体を持つ」；『アリストテレス「天と地について」註解』第2巻第8章（第13講）第6節（L.3, p.172a）「それゆえ、アリストテレスはここで、プラトン主義者たちが「悪霊たち」と名づけていた、或る魂化された諸々の物体について語っていると思われる。彼らは、プラトン主義者アプレイウスが『ソクラテスの神について』という書物で言うように、悪霊たちは、身体という点で空氣的で、時間という点で永遠な動物であると言っていた」。

⁵ Cf. アウグスティヌス『悪霊たちの予言について』第3章（PL 40, 584）「悪霊たちの本性とは以下のようなものである。すなわち悪霊たちは、空氣的身体の感覚によって諸々の地上的身体の感覚を容易に凌ぎ、また敏活さによって、同じ空氣的身体のより上位の可動性のゆえに、任意の人間たちや獣たちの走行だけではなくて、鳥たちの飛行をも比類なく打ち負かす」。

⁶ Cf. アリストテレス『トピカ』第4巻第3章 124a6-7「中間的なものが属する類には、両極のものも属している」（アリストテレス全集新3, p.148）；『自然学』第5巻第1章 224b30-32「なお、ものが中間のものから転化することがあるのは、転化のさいに中間のものは反対のものどちらの側にたいしても反対のものとしての役割を果たすからである。というのは、中間のものは、或る意味で端であるから」（アリストテレス全集旧3, p.194）；『魂について』第2巻第11章 424a6-7「中間のものは、両極端のいずれの特性に対してもそれに対立するもう一方の特性になる」（アリストテレス全集新7, p.117）；『形而上学』第10巻第7章 1057a19-20「およそ中間のものは、これがそれらの中間のものであるところのそれら〔両極端のものども〕と同じ類に属している」（アリストテレス全集旧12, pp.345-6）；『政治学』第4巻第9章 1294b17-18「そして中間的なものもやはりそういうことになる、何故なら両極端のどれもがそのうちに現われるからである」（アリストテレス全集旧15, p.168）。

⁷ Cf. トマス『定期討論集 霊的被造物について』第6項主文（L.24.2, p.68, ll.176-85）「それに対して、プラトンやアリストテレスおよび彼らの追従者たちは、天体は魂化されていると措定した。同様にして、教会博士の間ではオリゲネスが天体は魂化されていると措定した。彼に追従したのがヒエロニムスであり、それは『コレヘトの言葉』第一章の「霊が全体を巡りながら周囲を巡り続ける」に対する或る註釈で明らかな通りである。それに対して、ダマスケヌスは、天体は魂化されていないと断言したのであり、それは導入された権威〔第一反対異論〕において明らかな通りである。それに対して、アウグスティヌスは『「創世記」逐語註解』第二巻および『エンキリディオン』において疑いのままに残している」（石田 2016c, pp.47-48）。

⁸ Cf. アルベルトゥス・マグヌス『「命題集」註解』第2巻第6区分第5項第3反対異論解答(Borgnet 27, p.133b)「哲学者たちによれば、空気の諸領域——それらを或る人々は諸々の「帯」[zona]と呼ぶ一方で、或る人々は諸々の「間隙」[interstitium]と呼ぶ——は三つ、すなわち、上位、下位、中間の領域がある。そして実際、上位の領域は、光っており、穏やかであり、精妙な空気に属し、強烈に熱い——そのことのゆえに、上位の領域は哲学者たちによって「灼熱」[aestus]と名づけられている——一方で、私の判断によれば、火によってではなくて星々との隣接によって光を保持する。そしてそれゆえ、そこでは土の影は縮減され減少させられるのだから、そのことのゆえに、太陽の諸々の光線がより長く上位の領域では存続する。他方で、われわれの周りにある部分[すなわち下位の領域]は、固い元素——それは土である——と、平らな表面に属する磨かれた元素——それは水である——に触れている。そしてそれゆえ、諸々の光線の大きな反射がそこでは生じており、その反射のゆえに、大きな輝きがそこでは生成する。他方で、これらの中で中間の領域は、両方の照明[すなわち上位の領域における光と下位の領域における輝き]の原因を欠いているがゆえに、強烈に寒く暗い。そしてそれゆえ、その領域は嵐のようであり、そこでは諸々の嵐、雪、雹が生成する。そしてこの領域は悪霊たちの住処である。そのことのゆえに或る聖なる教父たちは、人間たちへの諸々の損害と恐怖のために悪霊たちは諸々の雪や雷などを引き起こすと言う。そしてそれゆえ、その場所はどんよりした空気に属していると教父たちによって見なされた」；ボナヴェントゥラ『「命題集」註解』第2巻第6区分第1疑問解答(QR2, p.169a)「神の寛恕[clementia]および摂理は、悪霊たちが過度に鋭くわれわれを誘惑することのないように、しかしながらまた、悪霊たちがわれわれを興奮させうるほど十分にわれわれから離れた所にいることのないように、隔離された場所を悪霊たちに提供した。それゆえ、悪霊たちがどんよりした空気に住んでいるということは神の「思し召し」[sententia]に属するのに対して、それらがわれわれの所に来るということは「情け」[permissio]に属する。それゆえ、空気の間隙は三つあるのだから、悪霊たちがどの部分にいるのかがもし問題とされるとするならば、以下のことが蓋然的だと思われる。悪霊たちは中間におり、そこには混濁、荒廃、諸々の圧力の多様がある。そのようなわけで、悪霊たちはしばしば諸々の風や雨を引き起こす」。

⁹ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第3巻第7章(PL 34, 283)「ことに鳥たちは地においても休息し、ひなを産むのである。蒸気になった水分が地の上に伸び広がっているからである。それ故聖書は「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上」と語った後、「天の大空の面を(に沿って)飛べ」(一・二〇)と付加して述べているのである。これによって前に曖昧であったものが少し明瞭にされたと言えよう。というのも天の光体について言われた時のように「天の大空に」(一・一五)とは言わず、鳥は地の上、天の大空の面を(に沿って)飛べ、つまり天の大空に接して飛べと述べているのである。というのも、そのうちを鳥が飛ぶこのうっとうしく湿った空間は、静謐な安らかさの故に天の大空に属する、鳥も飛べないかの空間に隣接しているからである。だから鳥たちは確かに天空を飛ぶのであるが、かの詩編がそれをも地の名で一括したところの天空を飛ぶのである。この空の故に聖書の様々な箇所、空の鳥と呼ばれているのであり、「天の大

空に」ではなく「天の大空の面を(に沿って)飛ぶ」のである」(アウグスティヌス著作集 16, p.76) ;
ベダ・ウェネラピリス『ヘクサエメロン』第1巻(『創世記』第1章第20節に対する註解部分)

(PL 91, 26C)「さて、以下のことが知解されるべきである。鳥たちが天の支え〔firmamentum caeli〕の下を飛ぶと言われたのは、この〔天という〕名によってエーテルのこと、すなわち、上位の空気の、鳥たちがそこで飛ぶような混濁してどんよりした場所から天空〔astra〕にまで亘る空間のことも示されてしまうからであり、またその空間はまさしく穏やかでかつ輝き〔lux〕という点で不当なところがないほど明るいと思われているからである。〔引用者による中略〕それゆえ、鳥たちは天の支えに沿って飛ぶと正しくは言われる。なぜなら、われわれが言ったように、空気のこれら混濁した諸々の空間——それを鳥たちの飛行が支えている——はエーテルに隣接しているからである」。

¹⁰ 同様の異論は次の箇所にもある：『定期討論集 悪について』第16問題第1項第6異論(L.23, pp.279-80, ll.57-67)「さらには、中間は両端の本性を識別する。しかるに、最上位の物体、すなわち天体は、生を分有する。というのも、哲学者たちによれば、天体は魂化されているからである。同様にして最下位の物体においても、すなわち土と水において、そして空気の下位の部分においても、生を持つ或る魂化された諸物体がある。それゆえ、中間の〔部分の〕空気においても、生きている或る魂化された諸物体がある。ところで、こうした類のものは悪霊たちであるしかない。なぜなら、鳥たちはそこまで上昇することができないからである。それゆえ、悪霊たちは、本性的に合一された身体を持つ動物である」。

¹¹ Cf. アリストテレス『生成と消滅について』第1巻第3章 318b29-33「風と空気は、感覚に照らしてみれば、その存在の程度はより低い〔引用者による中略〕、しかし、真理に照らすならば、風と空気のほうが土よりも、いっそう〈この何か〉であり、形相なのである」(アリストテレス全集新5, p.240) ; トマス『アリストテレス「生成と消滅について」註解』第1巻第3章(第8講)第8節(L.3, p.294ab)「そしてアリストテレスは、端的に生成および消滅することが、第三の仕方に属する「意見に即した場合」と、第二の仕方が関わる「事物の真理に即した場合」とでは別の仕方であると言う。その理由は以下の通りである。「気流」〔spiritus〕、すなわち風と、空気は、「感覚に即しては」、すなわちもし感覚されるものに基づいて事物の存在が判断されるとするならば、より小さく存在する。そしてそれゆえ、何であれ端的に消滅するものどもは、第三の仕方に即して、感覚されないものどもへの変容を通じて消滅されるとされる一方で、それらが土へと変えられる場合と同様に、それらが触れたりさわったりできる何らかのものへと変容させられる場合には、端的に生成されるとされる。しかし、事物の真理に即せば、反対のことが生起する。なぜなら、空気は土よりも大いにこの何か〔hoc aliquid〕であり形象〔species〕であり、より完全な有だからである。そしてそれゆえ、真理に即せば、もし土から空気が生じるとするならば、逆であるよりも、より大いに端的に生成が存在する」。

¹² G&S (p.192) に従って、《uniretur》を《uniatur》と読み替える。

なお、同様の異論は次の箇所にもある：『定期討論集 悪について』第16問題第1項第4異論

(L.23, p.279, ll.32-48)「さらには、より下位の秩序に属する何かがより上位にあればあるほど、それだけ一層それは上位の秩序との大きな結合を持つ。それゆえ、『原因論』という書物では次のように言われる。諸々の知性体の中で、何らかのもの、すなわち下位の知性体はただ知性体だけであるものであり、またそれらの中で、何らかのものは、すなわち上位の知性体は神的な知性体である。そして諸々の魂の中で、何らかのものは、獣たちの魂のようにただ魂だけであるものであり、またそれらの中で、何らかのものは、人間たちの魂のように知性的な魂である。そして諸々の物体の中で、何らかのものはただ物体だけであるものであり、またそれらの中で、何らかのものは魂化された物体である、と。それゆえ、ディオニュシオスは『神名論』第7章で、「神の知恵は第一のももの諸々の終極を第二のももの諸々の始原に結合する」と言う。しかるに、空気は土よりも高貴な物体である。それゆえ、或る諸々の地上的物体は魂化されているのだから、ましてなおさら、或る諸々の空氣的物体は魂化されていることになる。そしてこうした類のものをわれわれは悪霊たちと言う」。

¹³ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第7巻第15章 (PL 34, 363)「だから確かに人間の魂の本性は土から成るのでもなく、水からでも空気からでも火からでもない。しかしながら自らの身体のより粗い質料、つまり自らの肉体を構成するものへと変化した湿った土的なものを、魂はより微細な身体の本性、つまり光や空気によって統治しているのである。この二つのものなしには身体のうちのかなる感覚もなく、また魂によるいかなる自発的な身体の運動もない。しかし為すことより知ることの方が先でなければならないように、動かすことより感覚することの方が先である。だから魂は、非物体的なものであるので、非物体的なものに最も近い火あるいはむしろ光や空気をまず動かし、これを通してより粗大な身体の成分、つまり水や土を——これによって身体の堅固さが保たれる——動かすのである。この後者は、行為のために備えられているというより作用を受けとめるのにより適している」(アウグスティヌス著作集 16, p.233) ; 第19章 (364)「しかしこの世界のうちで卓越した物体であり、水や土のような鈍重な受動性でなく、卓抜な能動性をもった光や空気によって、魂はいわば霊的なものにより相似したものによってのごとくに物体を統治するのである」(p.236)。

¹⁴ 同様の異論は次の箇所にもある：『定期討論集 悪について』第16問題第1項第5異論 (L.23, p.279, ll.49-56)「さらには、それを通じて何かが[別の]何かによりよく適合するようなものは、当該の事物の担い手である。例えば、もし陰の物体が媒介となる透明な物体によって照明されるなら、透明な物体はよりよく照明されうるものである。しかるに、人間ないし他の動物の地上的身体は、生の諸々の息吹 [spiritus uitalis] ——それは空氣的物体である——を通じて生かされる。それゆえ、空氣的物体は、地上的物体よりも魂化されうるものである。そしてかくして前と同じである」。

¹⁵ Cf. アヴェロエス『天球の実体について』第2章 (Venetiis 1562, t.9, f. 6r, litt. B)。

¹⁶ Cf. アリストテレス『魂について』第2巻第1章 412a27-28「それゆえ魂とは、「可能的に生命をもつ自然的物体の、第一次の終極実現状態」と規定される」(アリストテレス全集新 7, p.66)。

17 Cf. トマス『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項主文 (DP, p.175ab) 「もし霊的実体が自分の内に知性と意志とは別の能力を持たないなら、こうした諸作用は物体をぬきにして完遂されるのだから、霊的実体は物体と余計に合一されている。というのも、物体の形相はすべて何らかの活動を物的に作出するからである。ところで、もしそれらが他の諸能力を持つなら——それはプラトン主義者たちが悪霊たちについて、悪霊たちはこころという点で受動的であると言いながら考えていたことであると思われる一方で、『自然学』第7巻で証明されるように、魂の感覚的部分においてのみ受動はあるのだから——、そのような諸実体は、そのような諸能力の活動を諸々の規定された器官を通じて行使するために、器官的身体と合一されなければならない。ところで、空氣的物体はそのようなものではありえない。というのも、それは形づくられうるものではないからである。それゆえ、諸々の霊的実体が諸々の空氣的物体と本性的に合一されていることはありえないということが明らかである」；『定期討論集 悪について』第16問題第1項主文 (L.23, p.283, ll.341-7) 「魂化されたより下位の物体はすべて、魂の相異なる作用のゆえに、器官的である。ところで、物体が器官的でありうるのは、物体が自分において境界づけられうるものであり形づくられうるものである場合——それは空気には適合しない——のみである。それゆえ、いかなる空氣的物体も魂化されたものではありえない。なぜならとりわけ、もし空氣的物体が自分において境界づけられうるものではなかったとするなら、それは周囲にある空気から区別されることがありえないことになってしまうだろうからである」。

18 Cf. トマス『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項主文 (DP, p.175a) 「同質で均一の物体は全体と諸部分とで同じ形相を持たなければならない。ところで、空気の物体全体は一つの本性に属するものであることをわれわれは見る。それゆえ、もし何らかの諸々の霊的実体が空気の何らかの諸部分と合一されているなら、空気全体とも合一されなければならない。そしてその場合、空気全体が魂のあるもの〔animal〕であることになるが、『魂について』第1巻で言われるように、空気全体が神々で充満していると言っていた古代の或る人々はこうしたことも措定していたにしても、そうしたことは不合理に言われることだと思われる」；『定期討論集 悪について』第16問題第1項主文 (L.23, p.283, ll.335-40) 「空気は全体と諸部分とで類似した物体であるのだから、もし空気の魂化された何らかの諸部分が措定されるなら、空気全体が魂化されていることが必然であるが、それが偽であることは明らかである。なぜなら、生のいかなる作用も、運動を通じても他の何らかのものを通じても、空気全体においては認知されないからである」。

19 Cf. トマス『定期討論集 霊的被造物について』第6項主文 (L.24.2, p.68, ll.176-85)。註7を見よ。

20 Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第12章 434b9-11 「しかしさらに、少なくとも感覚をもっているなら、その身体は単体的なものであるか、それとも複数の基本要素が混合されたものであるかのどちらかでなければならない。だが、それは単体的ではありえない。なぜなら、もしもそうであるとすれば触覚をもたないことになるが、この感覚をもつことは必要不可欠だからである」 (アリストテレス全集新7, p.174) ; トマス『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第11章

(L.45.1, p.256, ll.182-8) 「もし」何らかの物体が「感覚を持つなら」、それは「単純」であるか「混合されたもの」であるかが「必然であり」、そしてそれが「単純」であるということは「不可能である」。なぜなら、もしそれが単純な物体であったとしたなら、「それは触覚を持たないことになってしまうだろう」からである。実際、そのような感覚をすべての動物が「持つことは必然」であり、それは、示されたように、進行する〔processivus〕諸動物だけではなくて、不可動的な〔immobilis〕諸動物もまたそうである」。

²¹ Cf. トマス『定期討論集 悪について』第16問題第1項主文(L.23, p.283, ll.366-9)「それゆえ、いかなる空気の物体も魂化されたものではありえないということが残される。そしてそれゆえ、悪霊たちは、自身と本性的に合一された身体を持たないとわれわれは言う」。

²² Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第11巻第13章(PL 34, 436)「人は、悪魔の本性そのものについて委曲を尽して探求するのが常である。そしてある異端の人々は、悪魔の悪しき意志の困難な問題につまづいて、悪魔の本性全体を、至高にして真なる神の被造物とは異なるものとしようと、神に対抗する別の原理をこの者に与えようと試みることになる。というのも彼らは、存在する事物は、何らかの実体である限り善きものであり、その方によってすべてのものが善きものであるその神によってでなければそれらは存在しえないことを理解しえないのである。他方また彼らは、悪しき意志とは、より劣る善きものをより優れた善きものよりも優先させるという無秩序な動きであり、こうして理性的被造物の霊が、卓越した自らの能力に陶醉し、傲慢で膨れ上がる結果になったことも理解しえないのである。この傲慢によってこの霊は、楽園の霊的至福から滑り落ち、嫉妬によって自らを滅ぼすことになるのである。しかしこの者においても、生きているということそのことは善きことである。また悪魔そのものの、また悪霊の霊がその大気中であてがわれた身体を生かしめることも善きことであり、またどんなに悪意あり、ねじ曲った者であれ人間の魂が地上にあてがわれた身体を生かしめることも善きことである。こうして彼らある異端の人々は、神が創られたある種のもので自らの意志によって罪を犯すということを望まず、神ご自身の実体が先ず必然性によって墮し、次いでその後、償い難く意志によって墮し、邪曲なものとなったと主張している。しかし彼らのこの極めて愚かな誤りについては、わたしは他の機会にすでに数多くのことを語ってきた」(アウグスティヌス著作集 17, p.63) ; 『神の国について』第9巻第10章(PL 41, 265)「わたしたちの思い出に近い時代を生きたプロティノスは、たしかに、他の人にぬきんでプラトンをよく理解したということで賞讃されている。プロティノスは人間の魂について、「あわれみ深い父は、彼らのために死滅という鎖を作った」と論じている。彼は人間が身体において死すべきものであるということ自体を、人間がこの世の生の悲惨によってつねに束縛されることのないようにさせた、父なる神のあわれみの賜物であると考えたのである。／ダイモンの邪悪は、こうした神のあわれみにふさわしくないと考えられる。また彼らは、感情に従う魂の悲惨に加えて、人間のような死すべき身体ではなく、永遠の身体を受けているのである。もし彼らが人間と同じく死すべき身体を持っており、神々と同様に至福の魂を持っていたならば、もちろん人間よりも幸福であったことだろう。しかし、もし彼らが悲惨な魂と共に少なくとも死すべき身体をも持つに値する

ものであり、しかもまた、その死に際して苦しみからはなれ平安を得るよう、何ほどかの信仰を求めていたとすれば、彼らは人間と同じものであっただろう。だがしかし、彼らは魂において悲惨であるがゆえに、人間よりも不幸であるばかりでなく、身体が永遠の鎖につながれているゆえにかえってより悲惨であるのである。なぜなら、アプレイウスは、ダイモンが信仰と知恵の訓練によって進歩して、ダイモンから神々になるのだと〔人々が〕考えることを欲してはいないからである。彼ははっきりと、ダイモンは永遠にダイモンであると断言しているのである」（アウグスティヌス著作集 12, pp.258-9）；トマス『「命題集」註解』第2巻第8区分第1問題第1項主文（SS 2, p.204）

「私は解答する。以下のことが言われるべきである。善い天使たちも悪い天使たちも本性的に合一された諸々の身体を持たない。その理由は以下の通りである。こうしたことがありうるのは、その諸々の身体の形相、あるいは少なくとも動原が、その諸々の身体とつり合いのとれたものである場合のみである。そして天使たちは、諸々の魂そのものよりも完全な本性に属するのだから、諸々のより高貴な身体を持つのでなければならなかったであろう。ところで、生成消滅しうるすべての物体の中では、複合の同等性のために天体との類似へといわば最大限に近づくがゆえに、人間の身体が最も高貴である。それゆえ、天使の諸々の身体は天体であるのでなければならなかったであろう。そしてその場合、天使たちは諸天球の形相であり諸天球の数に即して多数化されると措定する哲学者たちの誤りが帰してしまうであろう。しかしながら、こうしたことは、天使たちは本性的に合一された空気の身体を持つということ——それをアウグスティヌスが言っていると思われる。無論、こうしたことは、彼が反論していたプラトン主義者たちの立場を使用するという仮定の下で彼は言ったという限りでのみ言われている——よりははるかに蓋然的であることになるであろう」；『神学大全』第1部第51問題第1項第1異論解答（L.5, p.14b - p.15a）「上述のごとく（第五十問題第一項）、「有はすべて物体である」というのが一部のひとびとの見解であった。若干のひとびとの「身体と一つになっていない非物体的実体はひとつとして存在しない」とする考えも、そうした考えに由来するもののように思われるのであって、アウグスティヌスが『神国論』第七巻にいうごとく、「神は世界靈魂 *anima mundi* だ」とまで主張するひとびとがあるにいたっている。こうしたことは、然し、公教的信仰に、つまり、『詩篇』第八篇（第二節）の『汝の御稜威は諸天の上に揚げられた』という言葉のごとく、万物を超えて高きにある神を説く信仰に抵触するところから、オリゲネスはこれを神について語ることを拒否したのであって、ただ、その際、神以外の諸実体に関しては、他のひとびとの見解に従っている。その点彼は、他の多くの点についてと同じく、往昔の哲学者たちの見解に従ったために誤謬に陥っているのである——。また、ベルナルドゥスの言葉は、こんなふう解釈することができる。すなわち、被造の霊が必要とする物体的身体的な用具というのは、自然本性的に自らと一つになっているところのそれではなく、以下に述べられるであろうごとき（第二項）、何らかの目的のためにとられるところのそれなのである、と——。また、アウグスティヌスのこの言葉〔すなわち『「創世記」逐語註解』第3巻の箇所——引用者註〕は、決して自説を述べるものではなく、ただ、プラトン派のひとびとで、一種の気体的動物が存在しているとなし、それを悪霊の名で呼ぶところのひとびとの見解に立って語っているものにほかなら

ない」(神学大全 4, pp.152-3);『定期討論集 悪について』第 16 問題第 1 項第 1 異論解答 (L.23, p.283, ll.370-4)「それゆえ, 第一に対しては以下のことが言われるべきである. アウグスティヌスは, そこ [すなわち『創世記』逐語註解』第 11 巻の箇所] や他の多数の場所で, 悪霊たちの身体については, 或る学識のある人々, すなわちプラトン主義者たちによって窺われたことに即して語っており, それは上で導入された彼の権威 [すなわち『神の国について』第 21 巻の箇所] から明らか通りである」; 第 10 異論解答 (p.284, ll.451-7)「アウグスティヌスはそこ [すなわち『神の国について』第 9 巻の箇所] で, 神聖性への礼拝は諸々の身体の永遠性のゆえに提示されるべきであると措定していたプラトン主義者たちに反対して語っている. もし悪霊たちが不可滅の身体を持つなら, まさにそのことに基づいて悪霊たちはこころ [animus] という点で受動的であるがゆえにより悲惨であるということを示す際に, アウグスティヌスは彼らに反対しながら彼らの立場を使用している」.

²³ G&S (pp.192-3) に従って, 《quisque》を《quisquam》と読み替える.

²⁴ G&S (pp.192-3) に従って, 《asserat》を《asseuerat》と読み替える.

²⁵ Cf. アウグスティヌス『神の国について』第 21 巻第 10 章 (PL 41, 724)「たしかに同じ火が人間とダイモンの刑罰に用いられるのである. おそらくダイモンには, 学者たちが考えているように, 風が吹くときにその圧力を感じるような, 濃密で湿った空気から成る, ある種の身体があるのかもしれない. この種の元素がもし火によってまったく影響されることがなければ, 浴室で熱せられても熱くならないであろう. なぜなら, 熱くなるためには, まず熱せられ, 自分が受けたものを他に及ぼすからである. だが, もし, ある人が考えるように, ダイモンはいかなる身体も持たないとしたら, このような事柄について, 面倒な探求に骨を折る必要もなければ, 激しい議論で争う必要もない」(アウグスティヌス著作集 15, p.227); トマス『定期討論集 悪について』第 16 問題第 1 項主文 (L.23, p.281, ll.222-5)「悪霊たちが, 自身に本性的に合一された身体を持つにせよ, 持たないにせよ, こうしたことはキリスト教信仰の教説にほとんど関わらない」.

²⁶ 註 11 を見よ.

²⁷ Cf. トマス『定期討論集 神の能力について』第 6 問題第 6 項主文 (DP, p.175a)「混合物体は元素的物体よりも高貴であり, 形相に関しては最大限にそうである. なぜなら, 諸元素は諸々の混合物体の質料だからである. それゆえ, 最も高貴な形相である諸々の非物体的実体は, 諸々の混合物体と合一されなければならず, 純粋な諸元素とではない. ところで, いかなる混合物体も, それにおいては土と水が質料の量に即してより多く豊富になっていないようなものではありえない. というのも, より上位の諸元素も, より形相的であるがゆえに, 活動力をより多く持つからである. 他方で, もし上位の諸元素が量において超出したとするなら, 混合の何らのあるべきつり合いも保たれないことになってしまうだろう. なぜなら, より上位のものどもはより下位のものどもを全くもって上回ることになってしまうだろうからである. そしてそれゆえ, 諸々の非物体的実体が形相として合一されるのは, 諸々の空氣的物体に対してではなくて, 諸々の混合物体——それらにおいては, 土と水が質料的には過剰になっている——に対してであるということはある」;『定期討

論集『悪について』第16問題第1項第4異論解答(L.23, p.283, 1.404 - p.284, 1.412)「第四に対しては以下のことが言われるべきである。空気は土よりも高貴な物体ではあるが、しかしながら、空気も他のすべての元素も諸々の混合物体と質料的に関わる。それゆえ、混合物体の形相は元素の形相よりも高貴である。そしてこのことのゆえに、魂は諸形相の中で最も高貴であるのだから、魂は、空氣的物体の形相ではなくて混合物体——それにおいては、混合の同等性が生じるように、土と水が量に即してより多く豊富になっている——の形相でしかありえない」。

※本稿は、JSPS 科研費 15J00085 の助成を受けたものである。